

Rosa Plunula

ローザ・プルムラ



●茨城大学・大学教育研究開発センター

ニューズレターNo.25

目次

巻頭言

教養と素養	1
習熟度別英語学習カリキュラム ...	2
について	
キャンパス情報	
ー各学部からー	3
Voice	
ー試験に備えてー	6
聞いて欲しい私の意見	
ーキャンパス環境ー	7
教養教育古今東西	9
掲示板コーナー	10
つぶやき	10

(平成15年1月発行)

教養と素養

副学長(教育担当) 池谷文夫

私が高校生の時、世界史の先生が好んで朗唱されたのが唐の詩人李白の詩「山中幽人と対酌す」でした。「兩人対酌して山花開く 一杯一杯復(ま)た一杯 我酔うて眠らんと欲す 卿(きみ)且(しばら)く去れ 明朝 意あらば琴を抱いて来たれ」。先生は中国史が専門でした。朗唱中は誠に楽しげで、「一杯一杯復た一杯」の行は、御自身が酒好きだったこともあり、まさに実感がこもっていました。

この詩一編で、唐代の文化に共感を覚えた思い出があります。こうした脱線は、適切なシラバスに即した授業という点では良い評価は得られないでしょう。しかし、受け手に対して与えるインパクト

と教育効果は、一様ではないけれども、測り知れないと言えます。

教養とは、学問知識をしっかり身につけることによって養われる心の豊かさである、とある国語辞典に定義されています。また教養は、ある人の将来の時点で何らかの効果をあらためて持つもの、と言ってよいでしょう。中世のヨーロッパで大学が出来る以前から、「学校」(Schola)で基礎的な学問知識として教授されていたのが「自由学芸」(Liberal Arts)でした。これがやがて大学におけるスコラ哲学を開花させ、今に影響を及ぼしています。まさに教養科目こそがカリキュラムの中核なのです。宗教改革者カルヴァンも日本布教者ザビエルも、そこから学識を深めました。

英語を学ぶ場合、いくら流暢に会話ができても、基本的な語彙が身につけていなければ、文字通り話になりません。同様に、ある学問分野でもその分野の「基本的な語彙力」がなければ、話は通じないでしょう。一般に「読み、書き、算盤」に相当する、平素身につけた知識や技術の上に、さらに学問知識を身につけた心の豊かさを築くことが、教養の目指すものでしょう。

習熟度別学習カリキュラムについて

大学教育研究開発センター

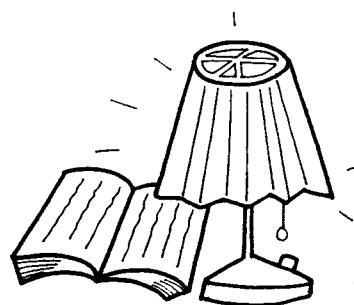
副センター長 永井典子

情報技術の急速な進展により、地球規模の情報ネットワークが構築され、国、地域を越え、情報が自由に瞬時のうちに送受信できるようになった。このような情報社会において、英語は、母語が異なる人同士の意思疎通をはかるための言語ツール、すなわち国際標準語としての役割を果たしている。そのため、英語学習の重要性が今まで以上に高まっている。このような英語学習に対する社会の要請に応えるために、茨城大学では、今年度から、人文学部社会科学科で習熟度別英語教育を開始した。そして、今後習熟度別英語教育は全学的取り組みとして、全学部へと拡大されていくことになった。来年度は、新たに農学部で、習熟度別英語教育が実施される。

今年度から開始した人文学部社会科学科1年生対象の習熟度別英語教育では、①学生の英語の習熟度に応じた授業を行い、②各レベルの到達目標を明確にし、その到達目標に到達できたのかを公正に評価する、そして③学生が自ら学ぶことができる教育環境（CALLラボ）を整えることを目指している。学生は4つのレベルにクラス分けされた対面授業を週2回とり、週1回のラボで自習を行っている。CALLラボでは、教科書に準拠した出版社のホームページでの学習や他のソフト及びサイトを使用することで、自ら英語を学ぶことが期待されている。また、学生の学習支援の一環として、学生のモチベーションを高めるための授業も後学期の第1回目に行った。この授業では、①現代社会での英語の必要性を実感するためのビデオの視聴、②社会科学科の教官による専門の授業での英語の必要性に関する説明、そして③各学生が今学期の具体的な学習目標を設定し、その目標が達成されているのか学期を通して自己点検を行う目標設定票を作成した。

現在進行中の習熟度別英語教育は、そのカリキュラム、教材、クラス分け方法、評価方法、CALLラボ、

および学生の学習支援体制の観点から、点検評価を継続的に実行中である。これらの、評価結果を踏まえ、15年度の習熟度別クラスを一層充実したものに整えたいと思っている。なお、来年度からは、習熟度別の「話す、聞く、読む、書く」という4技能習得型のクラスと、これらの技能がある一定のレベルに達した学生のために、EAP(English for Academic Purposes)という授業タイプが新たに加わる。EAPでは、特に、大学教育で必要とされる英語文献を読み取る読解能力、文献を批判的に検証し、議論する能力、レポートなどを書く能力を養成することを目標とする。



キャンパス情報 —各学部から—

人文学部から

大学という所は、私が想像していた以上に風通しの悪い所である。他の学部の状況はもとより、場合によっては、同じ学部の他学科の状況もわからないことが多い。こうした場を借りて、外に向けて学部・学科の事情を紹介することは、状況の改善に僅かながらでも資するものがあると考え、筆をとった次第である。

私が属している社会科学科の2年次生にとって、11月末から12月の時期は、今後の大学での勉学にとって極めて重要な時期である。なぜなら、この時期に各自の希望する専門教育の核となるゼミナールへの登録が決定するからである。ゼミナールは、社会科学科では唯一の、2年間（3年次、4年次）を一つの単位として履修する授業であり、原則としてこの時期決定した登録ゼミナールは変更できない。ゼミナールは、学生各自が選択した専門領域における勉学を深化させる場であると同時に、卒論を準備・作成する場ともなる。

毎年この時期、学科教務委員が中心となり、各ゼミナールが扱うテーマ、運営方針等々を記載した資料が、2年生に配布される。さらにゼミナール毎に説明会・公開ゼミナール・教官への個別訪問といった形式で、志望決定のため情報提供が行われる。

社会科学科では、およそ50のゼミナールが設置されているが、各ゼミナール毎に10名の定員が定められており、少人数教育が保証されるよう配慮されている。学生の希望には当然のことながら、偏りがあるが、現時点では多くの学生が第一希望のゼミナールに所属することができている。昨年度のデータによれば、84%の学生が第一希望のゼミナールに所属している。

（人文学部教務委員 中田 潤）

教育学部から

教育学部キッズ・クラブをはじめました。

文部科学省（生涯学習政策局）では、平成14年度から「新子どもプラン」に位置づく「大学地域開放特別事業『大学 Jr. サイエンス&ものづくり』」をはじめています。本学部も名乗りをあげて「キッズ・クラブ」を10月に創設し、完全学校週5日制に対応した連続開催として、毎週土曜に小学校5年生以上を集め、授業を行っています。この事業については、すでに工学部での実践報告が「生涯学習教育研究センターニュース」第20号に掲載されていますが、本学部の実践は継続中です。

キッズ・クラブには、教員養成担当学部としての理念があります。仕組みが理解できない現象を見せて子どもを驚かせるのは簡単で、しかも、「子どもが楽しんでいる」と見えるものです。しかし、その子の頭の中では、新しい概念が出来上がっているとは限りません。小学校にない「本物」が大学にあれば、それに触れさせることだけでも意味があるでしょう（鮎物標本など）。大切なのは、子どもたちの頭の中を変えることです。彼らがすでに知っていること、体験したことに結び付けて、深め、広げることです。作成したパンフレットの中で、「科学を楽しんでください」などとせず、「豊かな思考力が身につくことを願っています」としているのは、このような背景があります。

授業には、教科書もノートもありません。しかし、一瞬一瞬の現象が目を見せない、真剣勝負の時空が広がっています。ある日の昼食後、「さあ、午後の勉強をはじめよう」と言ったら、ある子どもが「えっ。これ、勉強だったの？」と切り返してきました。勉強と思わせない中で、彼らの思考を回転させる。大成功です（その子はしょんぼりしてしまいました）。

初日の子どもの感想は、「大学って暗くて怖い」とい

うものでした。ちょうど停電だったのです。地域貢献を目指すのであれば、土曜日には停電にならないようにする必要があります。もらえる予算は、学外者への講師謝金がありますが、旅費は出ない不思議な予算です。参加者負担で保険に加入してもらいましたが、保険が必要だと気づくことも、保険会社との折衝も教官から動きました。パンフレットも手作りです。子どもの側に立てば、毎回同じ先生の顔があった方が安心します。担任として教官が土曜に大学に来て、現時点では勤務割り振りを変えるところまでは話が成熟していません。走り出してからの教官の仕事は、外部講師の手配が中心です。担当の生涯学習係の方は本当によく動いてくださり、教官と事務官が二人三脚で動いております。

定員は20人（実際は18人）で、細々とやっています。応募してきた子どもたちは理科好きの（頭を動かすのが不得手でない）子どもたちで、打てば響くような、ある意味、理想的な学級ができあがったと自負しています。詳しくはホームページをご覧ください（<http://telemann.edu.ibaraki.ac.jp/kids/>）。

（教育学部 利安義雄・大辻 永）

理 学 部 か ら

我が国は科学技術立国を標榜している割には国民の理系離れが収まらない。理学部としても真剣に考えざるを得ないのだが、最も重要な多感な時期に、やれお受験や塾やらと記憶力偏重主義がまかり通っている。自然の分野の科目も例外でなく、感性を育む観察や実験、論理的思考力を育てる対話を通した共通理解の場がなくなって久しい。

古き良き時代には自然を背景として勝手に遊び回ったり、子供たち同士で話し合っている決まっていた。その基盤のもとでの学校の知識は実際の生活の中において少しずつではあるが活かされていた。つまり知識を活用するとはどういうことか学校で意識的に教わらなくても子供たちが自然に身につけていたのである。このことが授業において真に理科教育を豊かなものにしていただのではと推察される。

今年度のノーベル化学賞に選ばれた田中耕一さんの

小学校時代を、メディアを通して拝見するに、教育の場の本来有るべき姿を考えさせられる。地域に根ざした子供たちの感性を学校の授業の中で活用した人間性豊かな小学校の先生と、職人気質で丁寧に仕事をこなしていく父親の後ろ姿から、田中少年は後にノーベル化学賞を射止めるに必要な観察力と、仕事からデータの新しい結果を見逃さない集中力を磨かれている。これこそ偶然のハプニングを感性と忍耐力、集中力でノーベル化学賞まで昇華させた原動力と考えられる。もう一人、ノーベル賞の小柴昌俊先生の場合も理論家の予言である陽子崩壊の観測のため岐阜県神岡町に造られたカミオカンデで観測実験に従事していたがデータが否定的なのでニュートリノ観測に切り替え、偶然にもマゼラン星雲内の超新星 SN1987A の爆発におけるニュートリノ検出に成功しニュートリノ天体物理学を創始したとしてノーベル物理学賞をえている。インターネットなどのメディアをとおして伝え聞く話を聞けば、この結果も単なる偶然でなく、理論の把握や実験のあり方に関し、先生ご自身の自然科学に関わる哲学的認識が重要な鍵となっている事が伺える。このことは田中耕一さんと同様に自然に対する感性と豊かな人間性を想像させる。将来、文部科学省がノーベル賞を大量に出したいと表明しているが、自然を味わうことのできる環境と精神的に豊かでいられる社会の基盤がなければ実現の可能性は低いといわざるを得ない。

最後に大学のあるべき姿の一つとして、感性の重要性は何も理系だけでなく学問分野を超えて重要なはずである。我が理学部だけでなく、茨城大学全体において文系、理系、体育系を問わず感性を磨く場を学生諸君と共に創造していきたいものである。

（理学部 教務委員 玉城 和宏）

工 学 部 か ら

皆さんがこれを読むのは、後期の授業も終りに近づいている頃だと思しますので、特に学部1年生に気に留めておいて欲しいことを書きます。

茨城大学の学生・卒業生は非常におとなしい、自分を売り込むのが下手である、とよく言われます。このことは就職の面接だけでなく、多くの場面で不利に働

農学部から

きます。実力が身につけていけば問題ない、という考え方もできますが、同じ実力なら他人と円滑にコミュニケーションがとれる人材を採りますよね。そういうわけで、在籍中にコミュニケーション能力を養って欲しいのです。

コミュニケーション能力を身に付けるための講義は大学では開講されていませんから、自分で対処するしかありません。接客系のアルバイトもひとつの有効な方法ですが、大学内でも、友人、サークル、事務の窓口、科目の担当教官など、気にいった／気にいらない人と接する機会はいくらでもあります。そういった機会をうまく利用しましょう。

2年生以降になると専門科目の比重がぐっと増えます。工学系の場合、先修科目を押さえておかないと他の講義がわからなくなることも往々にして起こりますから、解らないところは早めに解決しておくことが大事です。どこがわからないのか。自分はどう考えているのか。友人や教官へ質問するという行為を何度も繰り返すことで、そういった自分の意見を他人に伝える訓練にもなります。

特に多用して欲しいのは、教官への質問です。最初には抵抗があるかも知れませんが、教官に質問する権利は授業料の中に含まれていますから、無駄にしないようにしましょう。教官のほうも、口では「考えれば分かるだろ～」などと言いつつも、喜んで応えてくれると思いますよ。

(工学部 大瀧 保広)

つい最近イネの第一染色体と第四染色体の塩基配列が決定されました。この原稿が皆さんの目に届く頃にはイネ全ゲノムの塩基配列が決定されたというニュースが届いていることでしょう。第一染色体も第四染色体も10個以下の塩基配列の固まりとしてまとめ上げられています。この精度でまとめられているとすると、イネの全ゲノムが百程度の塩基配列のまとまりとしてつながることになります。また、塩基配列の精度は99.99%以上だそうです。これだけの精度であれば、三千塩基対の長さを持つ遺伝子の中で読み間違いのある期待値は1以下になります。つまり、日本晴という品種に関しては研究者が自分で塩基配列を決めることがほとんど必要ないほど正確だと言うことです。科学はジグザグで進むということを言った人がいます。

1985年頃までに分子生物学上の重要な発見や技術の確立が一段落したようにも思えたのですが、PCR法の発明など、技術の進歩は想像を超えた勢いで進み、今では、ショウジョウバエ、線虫、人、シロイヌナズナなどのモデル生物でゲノムの塩基配列が決定されています。多細胞生物の設計図を手にしたという意味でこれらの成果は月に人を送り込んだアポロ計画に匹敵するものと言えましょう。また、染色体上の位置情報から遺伝子を単離することはかつては大変な大仕事でしたが、モデル植物においてはそれほど大変なことではなくなりつつあります。21世紀初頭には後に、ゲノム科学が急速に花を咲かせた時代として記憶されるようになるに違いありません。科学の世界は今後も予想もしない発展を遂げる事でしょう。あなたも農学部でジグザグしてみませんか？

(農学部教務委員 久保山 勉)

Voice —試験に備えて—

田 中 秀 行 (理学部2年)

試験に備えてすべきことと言えば、当然試験勉強である。それ以外には特にないのではないだろうか。恐らくほとんどの学生が試験前になるといわれる試験モ

ードに入り、とたんに図書館の人口密度が増える。そして試験前日の追い込み、科目によっては徹夜で勉強することもあるだろう。ほとんど常識のようになってこの一連の行動について少し考えてみようと思う。

まずは試験勉強。これについては疑う余地もない。

次ぎに試験前。本当ならばここがおかしい。本来ならば授業があったその日に復習をし、わからない点は教授に質問に行き理解し、後顧の憂いをたったあと翌週の授業に臨む、これが正しいはずである。そのために予習復習の時間の目安まで学校が定めていてくれる。以上のことを毎日行っていれば、前日に徹夜などしなくてもよい…はずである。

しかし実際にはほとんど不可能であろう。かく言う私も「その日に復習」はできないことが多い。人によって理由は様々であろうが、なにぶん時間が取れない。恐らく大部分の学生が私と同じか似た様なものだろうと思う（…いや、思いたい）。

ではどうすればよいか。…結局どうにもならんのではなかろうか？まあせいぜいがノートをもらさず取っておくことぐらいなのだろうか？先輩にテストの傾向を聞いたり（むしろ過去問をもらったり）教授と仲良くなって傾向を聞いたり、まじめにやってないやつ末路はこんなものである（試験中に何やらこそこそするという方法もあるらしいがそれについての言及はここでは避ける）。こんなことばかり書いていると私が不真面目な人間のように思えるだろうが平均的な学生はこんなものであろう。

結局試験に備えて何をすればよいか？答は至ってシンプル。勉強である。

田 口 慶 子（教育学部3年）

入学して、まだ右も左も、単位のとり方もシステムもわからないまま、「取らなきゃならない」という義務感のもと、抽選に洩れては他の教室に行き…と、急がされるように教養を履修申告した二年前を思い出しました。後期も半ばにさしかかり、教養科目それぞれの相性も明らかになってきた頃でしょう。つまらなくて聞いていないなんて科目も、今更になって取り消す訳にもいかず、もてあましていて、後先不安だ…なんて思っている人もいるでしょう。そんな人のために私なりに今後の対策を講じてみようと思います。

まず、半分怠けてしまったなら、これからはそれなりに授業に耳を傾ける努力が必要だと思います。全てを理解する事などは出来なくとも、もしかしたら試験の耳寄り情報を得ることが出来るかもしれません。そ

して、試験はテストなのか、レポートなのかによって、これから授業に望む姿勢は違ってきます。テストなら今までの分のノートは友達に拝借させてもらって、これからはテストに備えてノートをとるし、もしレポートなら、早めにテーマなどを決め、それに即した情報を得るという視点に立って授業を聴いたり、本を読んだり、対策を立てておけばよいでしょう。

ここまで、私はやつつけでとる単位のとり方を述べてきましたが、興味は持とうと思って持てるものではなく、興味の無いものはないもので仕方ないと考えます。ただ、教養の科目のみならず、新しく出会ったもので興味を持てるものがあつたら、それには突き進んでいくべきだと思います。テスト対策のみに尽力しなくてはならないようなものではなく、自ら追いかけていけるようなものを教養科目では見つけて欲しいと思います。

加 藤 恵（農学部2年）

試験勉強は図書館でするのが好きです。残念ながら農分館は自習スペースが狭いので競争が激しく、席を取れないことも多いのですが、静かで集中できるので気に入っています。普段は小さな物音にも敏感になってしまう気がして、図書館で勉強することはほとんどありません。しかし試験前になるとなぜか、緊張感の漂う図書館の雰囲気が好きになるのです。

図書館で試験勉強をすると、効率よく気分転換が図れます。自宅では雑誌を読み出してしまうようなとき、図書館で、私はよく書架の間を歩き回ったりします。歩きながらほかの講義やレポートの資料を探したり、手足を伸ばしたり、といった事は狭いアパートの一室ではできないことです。自宅にある資料には限りがあるし、何歩も歩かずに本棚に手が届いてしまい、気分転換にはなり得ません。ほかに、ロビーのソファに座って新聞や広告を読んだり、遠くを眺めて目を休めたりするのもいいと思います。ただし、人の目があるために、あまり長い間ぼんやりともしてられません。これは、気分転換をしすぎないためのブレーキになります。

また、図書館は友人との情報交換の場にもなります。講義で理解できなかった事があるときも、友人と話し

ているうちに、頭の中の整理することができます。逆に、疑問点が増え、手分けをして調べ始めるような場合もありますが、それが後で役に立つこともあるのでばかにできません。試験の時期には友人と資料のやり取りをする機会も増えます。先輩から頂く貴重な資料のコピーをとって分け合うことも少なくありません。

試験に備えて、私は図書館へ行き、教室とは違った緊張感漂う雰囲気を感じて、気を引き締めて勉強に取り掛かります。緊蹙一番といった具合でしょうか。そして気分転換を図りながら、試験までの残り少ない時間を今年も同じ様に過ごしていると思います。

聞いて欲しい私の意見 —キャンパス環境—

天 久 親 紀 (人文学部1年)

私が初めて茨城大学を訪れたのは、大学入試2次試験前日の事でした。緊張しながらキャンパスを回る私の目に飛び込んできた、生協前に立つ大きなイチョウの木。3月を目の前にしてすっかり丸裸になっていたものの、その壮大さは私を驚かせるのに十分なものでした。これから巡る季節の中でこの木が色を変えていくのはきっと見物だろうと思い、「がんばろう！」って気になったのを覚えています。茨大キャンパスの緑は、私にとって茨大のイメージそのものであり、これから大切にしていきたいものの1つです。

茨大は狭く、古い学校です。キャンパス環境についての不満も少なからず存在します。「サークル棟」はそんな不満の1例だと思っています。サークル数に対して部屋数はかなり不足していて、1部屋をいくつかのサークルで共同使用している状態。サークルはこれからも増えていくだろうし、プレハブをたてるなり、なにかしらの手を早く打つべきだと思います。大学生生活の醍醐味の1つであるサークル活動が、より楽しく、よりよい環境で行われることを希望します。

大学でお世話になる施設として、生協の食堂があります。茨大の食堂は、非常によく運営されていると思います。とにかく安い！そしてうまい！学生の味方ですね。特に「地方フェア」はすごく面白いと思います。様々な地方から人が集まってくる大学ならではの食の楽しみ方だと思います。大学側と生徒側が協力して活動する生協がうまくいっているという事は、茨大がうまくいっている様で嬉しい限りです。

大学には様々な施設があり、私達の学校生活を助けています。それが少しでもよりよいものになるよう、

大学側と生徒側が協力しあえたらいいと思います。

齊 藤 稔 (工学部4年)

日立キャンパスに来て早や3年、日立キャンパスの雰囲気にも慣れ、これまでキャンパスの環境について考えることも無かった。今回、この文章を書くことになり、自分なりにキャンパス環境について考え、周りの人々にも意見を聞いてみました。

その中でも一番多かった意見は、生協の食堂をもう少し美味しくして欲しいというものである。日立キャンパスの周辺にはあまり飲食店も無く、昼の休み時間が短いということも有り生協の食堂を利用する学生が多い。学生はただ空腹感を満足させるためだけに昼食を取っているのではなく、少しでも美味しい物を食べ、午後の授業に向かう活力を得たいと思っているはずである。よって、生協の食堂にはメニューや味を改善して欲しいのと、大学側は学生がゆっくり昼食を取るように、12時40分から午後の授業を始めるのではなく、水戸キャンパスのように1時から授業を始めて欲しい。

次に、日立キャンパスはサークル活動があまり活発でないため、サークル活動をしたいと思っても多くの学生がどのサークルにも所属していないのが現状である。その主な原因は、キャンパス内に色々なサークルが活動できる施設が充実していないことと、サークルが積極的に活動をアピールしないからである。これらが改善されれば、今よりはサークル活動が活発になると思われる。

また、私的な意見だが、日立キャンパス内での学生のマナー違反が気になります。特に、タバコの吸殻を所かまわず投げ捨てたり、教室内にゴミ（空き缶や紙

くず)を置きっ放しの輩がいるのには、同じ学生として恥ずかしい限りであります。自分たちが学んでいるキャンパス環境を悪化させ、気持ちよく勉強に励むことができませんか？否!!学生はもっと良い環境で勉学に励めるようにキャンパスを綺麗に保つことを心がけるべきである。

藤 生 祐 介 (農学部1年)

これを書くためキャンパス環境について考えた時、頭に浮かんだことが2つある。茨城弁とクーラーについてだ。

まず、春に大学に合格して水戸キャンパスに来た時に初めて茨城弁を使う人と話した。こんなことを書くと思えるかもしれないが、茨城弁はかなりキツかった。若い人の話すことは別に平気なのだが、お年寄りに話しかけられると何を言っているのか分からないことがある。私の出身も北関東の方言の強い地方なのだが、茨城で暮らし始めた当時は困った。しかし、その茨城弁にも半年以上生活しているうちに慣れ、今では写ってしまいそうなくらいだ。人間、どんなことにも慣れるものだ。

次ぎにクーラーについて。私は農学部なのでほとんどの授業を共通教育棟で受講している。そのため他の棟のことは分からないが、共通教育棟では大教室にしかクーラーが設置されていない。そのため、夏に他の教室で授業があると暑い。さらに四階の人数の多い教室では人から出る熱が加えられすごく暑い。はっきり言って勉強のできる状態ではなくなる。ぜひクーラーを設置して欲しいと思う。

今まで悪い所しか書いていないので良い所も書こうと思う。

まずいい人が多い。悪い人もいるのだろうが、少なくとも私の周りにはいないと思う。みな親切でやさしい人ばかりだ。

また、少しキャンパス環境とは外れるかもしれないが、食品が豊富で安いと思う。一人暮らしをしている私にはとてもありがたい。

このような水戸キャンパスであるが、残念なことに農学部の私はあと4ヵ月で別れをつげ、2年次になれば阿見キャンパスに行くことになる、残り4ヵ月を大切に充実した日々を過ごしていこうと思っている。

教 養 教 育 古 今 東 西

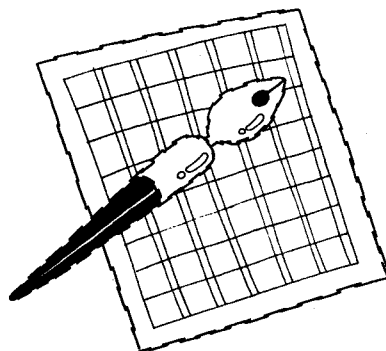
専門分野から無限に広がる教養教育

農学部教官 宮 口 右 二

専門分野の科目の中から教養教育が垣間見えることがある。例えば、著者の担当する講義の中で、ミルクや食肉などの畜産物の貯蔵と保存に関する科目がある。チーズは乳製品を代表する保存食品であるが、わが国でチーズといえば、熱処理したプロセスチーズが馴染み深い。一方、それらの原料となるのがナチュラルチーズと呼ばれる未加熱チーズである。そのうち、仔牛の胃から抽出された酵素であるレンネットの力でミルクを凝固させる西欧型チーズがよく知られるが、インドやモンゴルなどレンネットを使用しないで乳酸醗酵のみで製造する東洋型の酸チーズがある。製法の違いにより、硬さや色、味、風味などバラエティーに富む

ため、世界中にはチーズが400種類、あるいは500～1000種類ほどであるとされている。スパゲティーにかけるパルメザンやアニメのトムとジェリーでみられる穴の空いたエメンタール、青かびが生えたブルーチーズと国内でもいろいろな種類を目にする。日本でもかつて独自の乳製品があった。酪や酥、また、醍醐味の語源でもある醍醐といったヨーグルトやバター、チーズのようなものと考えられている。また、江戸時代、日本で初めて発刊された牛乳の専門書「白牛酪考」では、水戸光圀公も醍醐を作って食していたとされている。古くから、醍醐という知恵を使って、冷蔵庫がない時代から食べ物を保存してきた歴史を知ることは非常に興味深い。また、白かびで熟成される軟らかいカマンベールチーズの名付け親はナポレオンだそう。今では、北海道をはじめとして世界各地で製造されており、カマンベールの名前はチーズの性質を指し、生

産地を指すものではなくなった。しかし、本場フランスでは今もオージュ地方の農家手作りとうで生産されるものとは区別されているそうである。このように乳製品の保存について一つテーマを挙げても、中にはいろんな話題が尽きない。まさに専門分野には教養への窓口が無限に広がっているようである。チーズというと、著者がかつてスイスを訪れたとき、ディナーにいわゆるカマンベールチーズがテーブルにのっていた。「あ、カマンベールチーズですね」と地元の方に訪ねたところ、「いえ、これはヌシャテルというチーズです」と答えられた。そうここはヌシャテルという地名だったのです。この時、食べ物に対する人々の思いとこだわりを痛感させられる一方、日本では食の伝統が失われてきているのではと感じた。科学技術の進歩により、品質の安定した大量の食品が我が国にはたくさん輸入、生産されている。かたやスローフードに代表される伝統的な食についても見直されつつある。これからの食糧生産の問題は、かたよった専門知識だけでは対応できない予感がする。



掲 示 板 コ ー ナ ー

電子掲示板の利用について

平成13年度から、共通教育棟において、電子掲示板により、休講・教室の変更・集中講義及び大学の行事等を掲示されておりますが当分の間、学生の呼び出しや試験等については従来どおりの掲示板によりお知らせしますので注意して下さい。

掲示板を見ないことにより、所定の期日までに手続

きなどができず、不利な取り扱いを受けることもあります。

登校、下校、授業の合間には従来の掲示板と電子掲示板の両方の掲示に注意して下さい。

－ 毎日3回は見ましょう －

つ ぶ や き

明けましておめでとうございます。

昨年暮れに、一週間ほど世界遺産で有名な屋久島と熊本、大分の中山間地域に行ってきました。エコツーリズムの資料収集と視察が目的でしたが、エコツアーも体験しました。

私の講義担当科目は都市計画論ですが、大学院のころから地域計画の調査・研究にも取り組んでおり、中山間地域に調査に行くのは楽しみの一つです。

屋久島では、世界遺産に登録されたこともあってか、エコツアーのガイドをする民間のグループがたくさんあります。ツアーにもよりますが1日1万円前後のガイド料金をとるところがほとんどです。

こんなにガイド料金をとれないにしても、茨城県でも、人々の暮らしと密接に関わっている里山や平地林などの生活文化的価値のある自然を活用して、

都市・農村交流をもっと活発にできないものかと、地域の人たちと研究会を行っています。

学生にとって教室で学習し、研究することは不可欠ですが、地域社会の現場で何が起こっているかを体験することはもっと重要かもしれません。現場での問題点を改善し、人々の希望をかなえるために学生、研究者、大学は何ができるのかを自問自答することが大切だと思います。

国立大学の独立行政法人化が予定され、ますます大学の地域社会における役割が重要になってきます。学生も地域社会の一員であることに変わりはありませんので、教室や自宅に閉じこもらないで現場に出かけてみてはどうでしょうか？

(斎藤 義則)

発行日 平成15年1月

発行者 茨城大学 大学教育研究開発センター
水戸市文京2-1-1
029(228)8416(学生課教養教育係)